

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530654

研究課題名（和文）教師における児童生徒への援助行動の「適切さ」に関する研究

研究課題名（英文）The study of appropriateness of helping behavior  
when teachers assist students

研究代表者

松浦 均（MATSUURA HITOSHI）

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：90257577

研究成果の概要（和文）：

本研究は、教師がさまざまな場面で児童生徒を援助し支援していくことにおいて、その「適切さ」について検討したものである。そもそも援助の行動の適切さについては、その行動により被援助者側にどのような帰結がもたらされたのか、また被援助者側の意識や評価が重要な観点となる。援助を求める児童生徒がどのように具体的なリクエストをしていくのか、また教師がどのようにそれをくみとっていくのか、改めてこれらの課題が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The present study, we investigated when the teachers to assist the students about "appropriateness". About the appropriateness of the helping behavior, whether it was brought to the side which has consequences such as action by the recipient of support is important. It is also important further evaluation of the helping or support from the recipient side. Whether to accept it how the teacher also, whether to a specific request to which students seek help, these issues became clear.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：援助行動、援助の適切さ、援助-被援助関係、教師-生徒関係、コミュニケーション、社会的スキル

## 1. 研究開始当初の背景

社会心理学のなかの援助行動研究において、松浦（2008）は、個人的な対人援助と組織的な対人援助行動の相違を検討している

が、その中で、組織的な援助の場合は、被援助者側においては援助が適切に行われてしかるべきとの期待が大きく、援助が未完遂の場合にはその責任すら追及される可能性が

あることを示している。

個人的な援助行動の場合は、その援助が多少うまくいかなくても、十分な援助意思の元で行われた行為であれば許容される場合があるのに対して、組織的な援助行動の場合や援助行動自体が職業あるいは仕事のなかに含まれている場合は、対人支援的活動自体が業務サービスであるために、その業務が完遂することが前提として求められ、不完全な援助に終わった場合には厳しい目が向けられると言える。

さらに小池(2007)は、共感性と迷惑行為について、共感性を高めることで行為者と認知者間の不必要な葛藤を抑え、社会適応的に迷惑行為を抑制する方略を検討しているが、援助行動に関して言えば、「共感性」は援助者側の主たる要因であり、当該行為を「迷惑」と感じるかどうかは被援助者側の主たる要因と言える。つまり「援助者-被援助者」という二者関係の枠組みの中で良好な関係を構築するためには、両者双方の認知的な一致や同意が必要ということであり、本研究を進めていく上で、これらの知見が示唆するものは大いに有効と言える。

このような観点に立ち、学校場面において、とくに教師と児童生徒関係のなかでの、援助者側すなわち教師側の日頃の援助的行動が、どのように行われ、その適切さについてはどのように考えられているのか検討を進めていくことにした。

## 2. 研究の目的

教師の仕事内容は多岐にわたるが、対児童生徒の局面においては、学習指導や教授行動が主である。そのような場面では、当然、教師が児童生徒に対する支援的立場に立つことになるが、支援的業務としての心理的なサポートは継時的に時間をかけてじっくり取り組むのに対して、学習指導場面においてはその授業時間内の一時的な局面での対応となる。

そのような場面での児童生徒への対応はリアルタイムでのニーズを正確に読み取った上での確な援助行為が求められる。実は、このことは教師のスキルとしては相当に高いレベルのものであり現場において多くの教師が実践できているとは言い難い。むしろ昨今の教師と児童生徒の関係構築が困難な状況においては、今後早急に検討が必要な領域課題である。教師の援助行動や援助スキルに関する研究がほとんど行われてない現状にあって、スキル開発を目指す意義やその重要性は極めて大きいと言える。

本研究では、そのような観点から、教師と児童生徒関係における援助的行動の適切さについて、この問題を多面的に見ていくことを目的とする。

## 3. 研究の方法

小学校および中学校の教師に対して、学習場面および非学習場面における児童生徒への人的援助についてどのような事例を経験し、またどのような意識を持っているのか、半構造化面接を通して事例収集を行った。具体的には、各教科を学習中の場面や、授業外のような様々な場面で、児童生徒に対して、どのような援助的な行為を行っているか、さらにその帰結(援助効果・援助成果)がどうであったかということを探った。

さらに、教師(=援助者側)の援助意思および援助効果の認識と、児童生徒(=被援助者側)の援助の内容中身についての期待や欲求および援助効果の認識に差異がある場合、教師(援助者)が行う援助行動は児童生徒(被援助者)にとって最も望んでいるものではないはずである。この認識のずれ(ギャップ)を解消しないまま、同様場面で同様の援助活動を続けることは、両者にとって、とくに児童生徒にとって好ましいことではない。

このような観点から、教師および児童生徒に対して質問紙調査を実施する予定であったが、児童生徒に対する調査は実施困難であり、現時点では計画の段階である。教師に対しては、この観点に絞っての調査ではなく、普段の業務に関することと、とりあえず教師同士の援助-被援助関係について尋ねるべく、質問紙調査を実施した。

## 4. 研究成果

本研究は、援助行動の「適切さ」について援助者と被援助者双方の立場から、統合的に検討していくものである以下にこれまでの成果を簡潔に記しておく。

(1) 「適切さ」に関する諸々の検討(雑誌論文⑧, 学会発表の③⑦⑧⑨等)。

教師-生徒場面ではないが、本研究計画段階以前より検討を行っているものとして、緊急場面における援助者側の行動について検討したものがある。有名なラタネらの援助行動実験を参考に、実験室にて課題作業中の被験者が、隣室からの不明確な援助要請に対してどのような行動をとるのかVTRで撮影記録したものである。高木らの援助行動生起モデルは、援助者が、援助要請に気づき、援助行動が出るまでの時系列的な意思決定過程(あるいは思考過程)を説明したものであるが、本実験では、援助者たる被験者がそのような思考過程に基づいて行動が起きるのかどうか、時系列的に見たものである。

その結果、被験者の多くは、不明確な援助要請には気づいたものの、援助の行動にはいたらなかった。少数の被験者は、援助要請に気づき、援助を試みようとしたが、実験の構造上、直接的な援助は出来ないようになっており、間接的な援助(実験責任者に緊急事態

発生状況を伝えに行く)を行った(この時点で援助が生じたとした)。現実社会の場面で、こうした緊急事態に遭遇した場合には、援助者はどのように援助を行うべきか相当に考える。この思考過程の様相を取り上げた研究は極めて少なく、本研究ではその部分がかかり明らかになったと考えている。被験者には、VTRで撮影された自分の行動を、実験終了後に見てもらい、その時点でなぜそのような行動をしたのか一つ一つ説明をもらった。その結果、援助の手段や方法を総合的に検討していたことや、隣室の援助要請者のことが気になりながらも実験中の課題遂行義務により援助を諦めたことなどが明らかになった。援助意思がありつつも、適切な援助にたどり着くには、いくつもの細かいレベルの意思決定が必要であり、また最終的にどのような行動に至るかは被験者によって相当に異なる結果になった。同じ場面において、そこに遭遇した人が必ず同じ行動に至るわけではなく、また援助の行動に至る割合も小さいことが明らかになった。基本的には、援助が生起しない可能性の方がやはり高いという結果であった。

また、これも研究期間以前からの検討事項として、看護実践をしている学生に対して、患者に対する援助的・支援的活動(彼らにとってはいわゆる業務)の「適切さ」についてどのような認識を持っているか調査したものがあつた。援助者側の認識として、適切な援助になっているのかどうか考えた際に、被援助者側の認識をどのように推測するか、また被援助者が援助者側の援助をどのように評価していると援助者が認識するのかという点について検討した結果、援助者側においては「適切さ」の認識を持つことが難しく、被援助者側が援助者たる自分たちをどのように認識しているか推測することがなかなか難しいことが明らかになった。すなわち、被援助者側の意図や感情を推測しながら援助をしていく必要がある援助者において、被援助者のそれらを認識しきれていない現状が明らかになった。援助の「適切さ」を見極めることの難しさが示されたといえる。

(2) 学校場面における教師-生徒関係、教師間の支え合い、および子ども同士の支え合いについて(雑誌論文①⑤⑦および学会発表④等)

教師-生徒関係における援助-被援助関係は、基本的に教師が生徒に援助をするといういわば上下関係的なものを想定している。この関係の中で、教師がどのように児童生徒を支援し、その適切さをどのように考えているのかということについて、本研究の検討課題にしていたが、複数の教師に対してこの点を直接的に面接で尋ねているが、現時点で結果

をまとめ切れておらず、今後の機会において発表する予定である。概略として、様々な援助行動カテゴリーにおいて、教師は援助的行動をしてはいるが、児童生徒の援助要請や、援助要請意図、援助後の感情等について、教師は必ずしも把握しておらず、援助の適切さというような枠組みでこの問題を考えていない事案が見られた。児童生徒の側にこの問題について問う機会を得られていないので、対応関係は明確にはなっていないが、教師に助けをもらうということについて、児童生徒の側においても、あまりそのような認識がない可能性が高い。つまり、教師の側も児童生徒の側も、援助-被援助関係という枠組みをあまり認識していない可能性があり、援助の適切さという問題が明確に認識されていないことが示唆される。今後、詳細に検討していく。

教師同士の相互援助関係については、近隣の小学校と中学校の協力を得て、現職の教員100余名を対象に普段の教師同士の様相を質問紙調査と自由記述調査を実施した。そのなかで、日頃の教師同士の相互援助関係が、職場全体の風土の認識とその学校における諸活動全般にどのような影響を及ぼしているか検討した。その結果、主に学年団を構成する教員同士で良好な相互援助関係が構築されている場合は、職場風土もよく、活発な活動が展開されていることが示唆された。援助する側の教師と援助される側の教師の意思疎通と、とくに援助される側の教師が遠慮なく援助を要請できる環境を構築することが重要であることが改めて示された。

次に、児童同士の支え合いについて、小学校高学年の学級において、学級集団づくりのために、子どもどうしの関わりの成立に向けた教師の働きかけについて検討した。特に一人ひとりの子どもに「自分は級友から受容されている」と感じる他者受容感がどのように形成されるのかに着目し、他者受容感を形成する子どもどうしの関わりを明らかにすることを目的としたものである。小学校5年生1学級でビデオを用いた観察を行った。採取した79個のエピソードや教師の談話等を分析して、学級集団づくりの実践の特徴を表す4つのカテゴリーを抽出し、子どもどうしの関わりの成立のプロセスモデルを生成した。その結果、①子どもどうしの関わりを成立させるためには級友の「変化に気づく」、「他人事にしない」、「級友に働きかける」という3つの要因が必要なこと、②子どもどうしの関わりを成立させるためには「変化に気づく」ことが出発点であること、③教師が「支え合い」とよぶ、この子どもどうしの関わりによって、子どもたちに他者受容感が形成され、子どもの問題行動が減少することが明らかになった。

(3) 援助行動に関する社会的スキル等について(雑誌論文①③④⑤⑥, 学会発表①②⑤等)

日頃、筆者らは社会的スキル教育をベースとした教育実践を行っているが、そこでの効果について検討したものである。「わくわくコミュニケーションクラブ」と称する学生ボランティア団体によって、小学生のコミュニケーション能力の向上をめざすプログラムを開発実践している。その効果測定方法として特に「あいさつする・話す・聞く・頼む・断る」スキルについて PA(Performance Assessment)が試行されてきた。学校で生起する児童同士のもめごとの多さから、本研究では感情教育を経て統合型解決方略を使って解決に至るといった学習の機会が必要と考え、小学4-5年生5名に対し一連のプログラムを実践した。

学習後には、統合型解決方略を用いてコミュニケーションする姿が見られた。また PAを用いてその効果測定が可能かを探るため、課題(Task)と評価規準(Rubric)の開発を行った。本研究で開発された Rubric では妥当性の検証はされていないが、児童の対人葛藤場面における統合型解決方略を獲得する段階的変化の過程が具体的に記述されたことから、児童の現在の到達段階と今後の指導方針を明確化するための指標となりうる事が示唆された。

この他、大学の授業としての教育実践として、県内の過疎地域での小学校でコミュニケーションをキー概念として授業実践を行っているものがある。このなかで、社会的スキル獲得を狙いとした授業開発において、授業者(本研究に照らしていえば援助者)が、どのような観点から児童生徒と寄り添っていかうとするのか、そこにどのような課題があるのか検討した。また大学の授業内での学生同士のグループ活動における協同学習場面での学生同士のコミュニケーション状況について検討した。いずれも、直接的な援助行動に焦点を当てたものではないが、援助-被援助関係の状況がある程度把握することに貢献する研究である。

(4) 総括として

援助行動の「適切さ」を、どのように考えるのか、この問題に取り組んでみて、様々な新たな課題が明らかになった。

たとえば、平成23年3月に起きた東日本大震災後の災害救援活動や復興支援活動における援助者側の行動については、阪神大震災以降、多数のボランティアが入り活動を続けているが、その際の「適切さ」については、これまで以上に、そこに焦点が当てられている。つまり被災者側がどのように助かるのか、

通常の状態に戻っていくためにはどういう支援が必要なのか等々、これらは、どちらかという目に見えるはっきりした援助活動であり、援助の適切さも比較的わかりやすいといえるが、教育場面における援助の適切さは、これらに比べると、わかりにくいと言わざるを得ない。発達支援や学習支援といった援助がテーマの場面であれば、援助の在り方もこれまで多数検討されてきているが、通常の学校場面での援助という問題については、意外に検討されておらず、援助者側において何が援助であるか、被援助者側においてはどのような援助要請ができるのか、そしてその適切さとはどんなことを指しているのか、これらについて何らかの規定されたものはなく、それぞれ個別の事例で個々人が判断するような形になっている。こういう状況で、援助が必要な児童生徒がどのように教師に対して援助を求めるのか、さまざまな観点からの検討がこれからも必要であるということを感じながら進めてきた。今後も、適切な援助をテーマにして、いろんな観点から幅広くこの問題について考えていく。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

①松浦均 「やさしさの行動力」を育てるためには 児童心理 第66巻 印刷中によりページ不明 査読なし 掲載決定 2012年

②小池はるか・吉田俊和 共感性・社会考慮が公共の場における迷惑認知に与える影響 高田短期大学紀要 第30巻 印刷中によりページ不明 査読なし 掲載決定 2012年

③廣岡雅子・古結亜希・中西良文・松浦均・梅本貴豊 小学生のコミュニケーション力を高めるための実践的研究 東海心理学研究 第6巻 Pp. 36-43. 査読有 2012年

④前原裕樹・松浦均 教育実地研究における学生の授業案作成および実践にともなう困難さとその克服過程に関する研究 -学生へのインタビュー調査を手がかりに- 三重大学教育学部研究紀要 第63巻 Pp. 275-285. 査読なし 2012年

⑤松浦均 学校で健康な被援助性を育てるためには 児童心理第65巻16号 Pp. 83-87. 査読なし 2011年

⑥松浦均・近藤亜裕美 協同学習グループ内のコミュニケーション行動について 大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-第19号 Pp. 27-34. 査読なし 2011年

⑦坪田吉巨・赤木和重・松浦均 小学校校舎園における学級集団の形成過程 -他者受容感を育てる子ども同士の「支え合い」- 三重大学教育学部研究紀要第62巻 Pp. 235-256. 査読なし 2011年

⑧松浦均 対人支援場面における看護学生の感情と患者の感情推測について -看護実習経験者と未経験者の比較検討- 三重大学教育学部研究紀要第61巻Pp. 263-271. 査読なし 2010年

〔学会発表〕(計9件)

①篠塚和賢・松浦均・松本金矢・根津智佳子・南学・中西良文・前原裕樹 学生による「コミュニケーション」をねらいとする授業の構築と実践-志摩市公立幼稚園・小中学校における教育実地研究- 日本教育大学協会研究会発表概要集 Pp.178-179. 2011年10月15日

②松浦均 教育フィールドから見えた社会心理学の魅力と課題〔ワークショップ〕 日本社会心理学会第52回大会発表論文集(p.21) 2011年9月18日

③松浦均・岡村将弘・高比良美詠子 緊急場面における援助行動とその適切さに関する実験的研究(2) 日本社会心理学会第52回大会発表論文集 p.249 2011年9月18日

④松浦均・野呂幸 教師の相互援助関係が職場風土認知と学校活動に与える影響について 日本教育心理学会第53回総会発表論文集 P.505. 2011年7月26日

⑤近藤亜裕美・松浦均 協同学習グループ内のコミュニケーション行動について 東海心理学会第60回大会発表論文集 P.41. 2011年6月4日

⑥南学・中島誠・中西良文・松浦均 授業評価の改善は、教員にどのように捉えられたか 大学教育研究フォーラム Pp.43-44. 2011年3月17日

⑦松浦均・岡村将弘・高比良美詠子 緊急場面における援助行動とその適切さに関する実験的研究 日本社会心理学会第51回大会発表論文集 Pp.634-635. 2010年9月18日

⑧松浦均 日本社会における「助ける」、「助けられる」、「助け合う」ということの社会的意味は? 日本社会心理学会第51回大会発表論文集 (P.18) 2010年9月18日

⑨松浦均 看護学生における患者の感情状態の推測に関する研究 日本社会心理学会第50回大会/日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会発表論文集 Pp.554-555. 2009年10月10日

〔図書〕(計3件)

①松浦均. 他, ナカニシヤ出版, 対人関係の社会心理学, 掲載決定 2012年 (現時点では印刷中)

②松浦均, 他, ナカニシヤ出版, 学校で役立つ社会心理学, 2012年 (現時点では印刷中)

③小池はるか, 他, 一藝社, 保育者養成シリーズ『保育の心理学I』, 掲載決定 2012年 (現時点では印刷中)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松浦 均 (Matsuura Hitoshi)  
三重大学・教育学部・教授  
研究者番号: 90257577

### (2) 研究分担者

南 学 (Minami Manabu)  
三重大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 60309713

小池 はるか (Koike Haruka)  
高田短期大学・子ども学科・助教  
研究者番号: 60530714